人文科学研究所重点プログラム
「グローバル化とアジアの地域」研究会

共催：◎基盤研究（C）「アジアにおける平和の記憶を紡ぐメディアとしてのダークツーリズム」
（研究代表者：遠藤英樹）

【日時】 2017 年 10 月 22 日（日）　14：00～17：30
【場所】 キャンパスプラザ京都・6 階・第 1 講義室（立命館大学）
【報告者】

■　遠藤　英樹（立命館大学）
タイトル：
平和の記憶を紡ぐメディアとしての「パフォーマティヴなツーリズム」
――ダークツーリズムを弁証法的に乗り越える――
要約：
　ダークツーリズムにあっては、地域に残された死や災害の痕跡が「ダークネス」として構築されるが、そこには様ざまな問題点がある。ひとつは、ダークネスを観光資源化することにより「ダークネスの商品化」が生じることである。もうひとつは、「まなざしの暴力性」である。特定の地域を「ダークネスの場所」としてラベリングして観光するということは、つねに（とくに地域の人びとに対する）暴力性がともなうはずなのである。この自覚なしにダークツーリズムを議論することは甚だ危険であると言わねばならない。だが、こうした問題点があるにもかかわらず、ダークツーリズムには「平和の記憶を紡ぐメディアとしてのツーリズム」を構想し得る可能性も同時に秘められている。この可能性を切り拓き、ダークツーリズムを弁証法的に乗り越えるために、本発表ではドイツ・ベルリンの壁などを事例にしつつ、T.エデンサーによる「パフォーマティヴィティ」という概念を批判的に検討し議論を進めていく。

■　韓　準祐（多摩大学）
タイトル：
ダークツーリズムの視角からみた済州 4.3 事件と麗水・順天事件の観光資源化における課題に関する研究
要約：
　本研究の目的は、ダークツーリズムの視覚からみた済州 4.3 事件、麗水・順天事件の観光資源化における課題について考察を行うことである。両事件は日本統治からの独立後の韓国現代史を理解するうえで重要な出来事であるが、とりわけ 1990 年半ばから約 20 年の間、両事件に対する捉え方が変化し、ダークツーリズムの対象として位置づけられるようになったことは注目に値する。特別法が制定及び施行され、済州 4.3 事件と麗水・順天事件に関する抑圧された一般住民の犠牲者及び遺族の声が掬い上げられるとともに、両事件は「見る・読む」対象から「見学・観光」する対象となったのである。本報告では、このような済州 4.3 事件と麗水・順天事件のダークツーリズムの対象としての位置づけにおいて、浮き彫りになった課題について考察を行う。その際、朝鮮半島が置かれている休戦の状況、いまだに続くイデオロギー論争及びナショナル・アイデンティティに関する議論にも着目する。